

加齢研ニュース

令和 5 年 12 月 1 日
東北大学加齢医学研究所
研究会同窓会発行

【所長室便り】

田 中 耕 三

本年 4 月に所長を拝命してから、半年が経過いたしました。当初は、会議や打ち合わせに追われて、1 週間が大変長く感じられました。次第に運営会議、教授会、部局長連絡会議と続く毎月の会議のサイクルに慣れてきましたが、目の前のことをこなすだけになっていないか、長期的なビジョンで研究所を運営できているかと自問する毎日です。高橋事務長はじめ事務の皆様サポートには、いつも感謝いたしております。

前号の所長室だよりで、私の所長としての最大の仕事として、加齢研の将来を担う人材のリクルートを掲げました。これにつきましては、7～9月にテニュアトラック准教授2名の国際公募を行いました。応募書類の送付をDX化して、電子申請可能なシステムを構築し、海外からも容易に応募できるようにしました。その結果、外国人研究者を含む多数の応募があり、現在選考を進めているところです。一方もう一つ

の大きな仕事としてあげた旧動物舎の改修につきましては、当初とは状況が変化したため、あらためて計画を練り直す必要が出て参りました。残念ではありますが、加齢研の将来をじっくり考える機会としたいと考えております。

最近世間の耳目を集めたニュースとして、前号でもお伝えいたしました国際卓越研究大学の唯一の候補として、東北大学が選出されましたことは、皆様もご存知かと思います。これはいわゆる10兆円ファンドと呼ばれる基金の運用益により、大学が長期的に大規模な支援を受けるもので、これにより東北大学が世界のトップクラスの大学へと飛躍することが期待されます。しかし正式な認定には、有識者会議から出されたコメントに対応する必要があり、現在本部で対応中です。正式に認定されれば、加齢研にとっても大きな飛躍のチャンスになります。まだ認定前であり、具体的なプランはこれからですが、情報に注意しながら迅速かつ適切に対応して参ります。

加齢研としての活動に目を向けますと、概算要求による措置として、様々な環境要因の影響

加齢研ニュース 第 80 号 目次

所長室便り (田中 耕三)	1
分野紹介 (腫瘍生物学分野)	3
随 想 (濱本 裕美)	5
研究会便り (宇井 彩子)	7
所内人事消息	10
研究会同窓会広報 (山家 智之)	11
編集後記	13

を考慮した老化研究を行うことを目的とした環境ストレス老化研究センターが、本橋副所長をセンター長として活動を行なっております。それに加えて、杉浦教授が提案されている応用認知神経科学センターの提案が、文科省への説明を経て、新規事業として財務省に提出されました。これは喫緊の社会課題としての心の問題について、加齢研の認知神経科学研究者の暗黙知・総合知を、社会の現場で応用する橋渡し人材を育成することにより解決していこうという画期的な提案です。採択の通知を心待ちにしております。また若手研究者の活躍も著しく、優れた若手研究者を支援する創発的研究支援事業に、これまでに3件採択されており、優れた若手教員に贈られる東北大学ディスティングイッシュトリチャー・優れた若手助教に贈られる東北大学プロミネントリサーチフェローの称号も、それぞれ1名・2名に授与されております。これからの加齢研を支えていく若い力として、頼もしい限りです。

さて、新型コロナウイルスの流行が一段落して、感染症としての位置づけが5類に変更されたのに伴い、前号でお伝えしていた通り、新人歓迎会や園遊会といった対面の行事を再開いたしました。スマート・エイジング棟のロビーで、大勢の教員や学生が談笑する姿が、久しぶりに戻ってきました。コロナ禍による行動変容で、このような行事に対する考え方も変化してきていることを考慮して、簡素化した形での開催でしたが、学生が以前と変わらず活発に交流している姿を見て、少し安心いたしました。川島前所長が始められた画期的な取り組みである、所長と助教の懇談会でも、コロナ禍で少なくなっていた横のつながりが戻ってきたことを喜ぶ声が多く聞かれました。研究室の垣根を超えた交流は、実験方法についての情報や試薬・機器の貸し借り、共同研究の相談など、研究所の研究力強化という意味でも重要ですので、状況が許

す限り、今後も対面の行事を行なっていく予定です。スポーツ大会やトリートなど若手主体の行事に対しても、開催を奨励してサポートしていきたいと考えています。

対外的な連携としましては、6月に総勢13名で、スウェーデンのカロリンスカ研究所を訪問いたしました。これは、川島前所長がカロリンスカ研究所に留学されておられたことから、数年前に計画されたものですが、コロナ禍で開催が延期され、ようやく今年実現にこぎつけたものです。双方の研究者によるワークショップでは、まず能化日本国大使がご挨拶され、続いて川島前所長の基調講演が行われました。その後両研究所の研究者がお互いの研究を紹介し合い、今後の交流について話し合いました。ノーベル生理学・医学賞の審査委員会があるカロリンスカ研究所、美しいストックホルムの街並み、ノーベル賞受賞者が宿泊するホテルでの伝統的北欧料理スモーガスボードのディナーなど、印象深い訪問となりました。帰国後も、本橋副所長を窓口として、カロリンスカ研究所の研究者と連絡を取り合い、共同研究を進めると共に、来年はあちらの研究者が加齢研を訪問し、ゆくゆくは部局間学術協定へとつなげていくことを話し合っています。加齢研の重要なパートナーとして、この関係を大事に育てていきたいと考えております。国内に目を向けますと、金沢大学がん進展制御研究所が申請機関である、学際領域展開ハブ形成プログラム「健康寿命の延伸に向けた集合知プラットフォームの形成」が採択され、加齢研もこれに参画機関として参加することになりました。本プログラムは、異分野の研究所が連携して、学際共同研究を行うことを主眼としており、がん進展制御研究所の事業には、他に大阪大学微生物学研究所・慶應義塾大学先端生命科学研究所が参画しています。このような連携は、今後ますます求められるようになってくると考えられますので、教員の業務

の負担に留意しつつ積極的に連携を深め、形だけでなく、連携したからこそ可能になるような共同研究を進めていきたいと考えております。余談ですが、5月にG7科学技術大臣会合が仙台で開催された際には、EU閣僚や駐日EU代表団の方々が加齢研を急遽ご訪問され、加齢研でのがん研究についてご紹介いたしました。その際、EUの方々からは、日本とEU諸国との国際共同研究を一層推進したいとのご発言がありました。現在の研究は、自分の研究室内だけで完結するものではなく、国内外を問わずいかにネットワークを形成して共同研究を進めていけるかが問われています。研究所としても、そのようなネットワーク形成のインフラとなるような支援を模索していく所存です。

人事消息です。認知健康科学研究分野の野内類准教授が、8月31日付で加齢研を辞職され、人間環境大学総合心理学部教授としてご栄転されました。野内先生は、2008年に中央大学文学研究科で博士号を取得され、2009年より、加齢研で心理学・認知健康科学の立場から、生活介入による生活力向上について研究を行ってこられました。2017年にはスマート・エイジング学際重点研究センター准教授、2018年より加齢医学研究所准教授・文部科学省卓越研究員として、長らく加齢研にご貢献いただきました。新天地でのますますのご活躍をお祈り申し上げます。10月1日付で、遺伝子発現制御分野教授である本橋ほづみ副所長が、東北大学医学系研究科医化学分野教授に配置換になりました。本橋先生は、前医化学分野教授の山本雅之先生（現東北メディカル・メガバンク機構長）の下で准教授を務められた後、2013年に加齢医学研究所教授にご就任され、2014年以来加齢研副所長として、長きにわたり、まさに加齢研を支えて来られました。2021年より加齢研の環境ストレス老化研究センター長、本年度からは学内組織である未来型医療創成センター長

も務めておられます。本橋先生がご異動されることは、加齢研にとって大きな痛手ですが、今後も引き続き加齢研と研究面で連携していただき、医学系研究科と加齢研の一層の交流にご貢献いただけることを願っております。なお、本年度中は、引き続き加齢研副所長・環境ストレス老化研究センター長を務めていただくことになっており、これまでと変わらず精力的にご活動いただいております。

【分野紹介】

腫瘍生物学分野

腫瘍生物学分野は、2014年4月に設置され、加齢研の皆様方の温かい御指導、ご助力によりなんとか研究室が継続でき、もうすぐ10年になろうとするところです。現在は、助教の吉野優樹先生、方震宙先生、大学院生16名となっており、大学院生のうち、博士課程の学生さんは6名、修士課程の学生さんは10名で、それぞれの所属は、医学系研究科6名 生命科学研究科10名となっています。博士課程の学生さんのうち、医学系研究科の乳腺・内分泌外科学分野、婦人科学分野より各1名、山形大学医学系研究科外科学第一講座より1名の学生さんが共同研究としていらしています。

当分野では、遺伝性乳がん卵巣がん症候群の原因遺伝子の1つであるBRCA1の機能解析を中心に行っています。BRCA1は、BARD1とともにDNA修復、中心体制御などに関与します。BRCA1のがん抑制能として、これまでDNA修復能が注目されてきましたが、私達は、BRCA1結合分子OLA1を同定し、BRCA1がOLA1と複合体を構成し、中心体を制御することを明らかにし、腫瘍生物学分野として研究開始後も、この解析を行っています。

中心体は、間期には核の近くに存在する細胞内小器官で、細胞周期のG1期には1つですが、

S 期に複製されて2つになり、G2 期にはさまざまなタンパク質が集積して大きくなり、中心体が成熟します。分裂期には紡錘体極として、娘細胞への染色体の分配を担います。よって、中心体の数や構造の異常は、染色体分配の異常を引き起こし、発がんの原因になります。

OLA1 は BARD1 とも協調して中心体複製を制御し、BRCA1, BARD1, OLA1 のがん由来の変異により、これらの結合能が消失し、中心体複製が障害され、中心体数が増加することが明らかになりました。また、OLA1 結合分子として RACK1 を同定し、RACK1 も中心体に局在し、OLA1, BRCA1, BARD1 に結合して中心体複製に機能することを明らかにしました。RACK1 は、BRCA1 の中心体局在を促進し、がん由来の BRCA1 と RACK1 の変異で、BRCA1 と RACK1 の結合が弱くなり、BRCA1 の中心体局在や中心体複製に異常をきたすことも明らかにしました。さらに、乳腺由来細胞では、他の組織由来の細胞に比べ、中心体複製が亢進していることを明らかにし、このことは BRCA1 の異常により、特に乳がんが高頻度で発症する理由の1つであると考えられました。

さらに、DNA 損傷後に中心体数が増加する現象に BRCA1 が重要な働きをすることを明らかにしました。細胞に DNA 損傷を与えると、BRCA1 がリン酸化されて、核外に移動して中心体に局在し、分裂期キナーゼ Aurora A の中心体局在を促進し、中心体の過剰複製を起こすことを明らかにしました。DNA 損傷後に中心体数が増加した細胞は、細胞死を起こします。そのため、BRCA1 は DNA 損傷のシグナルを核から中心体で伝達し、修復できない重篤な DNA 損傷が出来たときには細胞死を誘導して、がん化を抑制するという BRCA1 の新しいがん抑制能と考えられました。

最近、分裂期キナーゼ Aurora A がユビキチンリガーゼ活性を持ち、OLA1 をユビキチン

化して、G2 期の中心体局在を減少させ、中心体成熟を促進することを明らかにしました。Aurora A の異常は多くのがんで見られ、これまでキナーゼ活性が注目されていましたが、新たにユビキチン化能も重要であることを明らかにし、Aurora A の異常による新たな発がん機構を明らかにしました。

中心体の数や構造の異常は、多くのがんで観察される正常細胞にはない明らかながんの特徴で、がん治療の標的として非常に有望です。これらの研究は、中心体を標的とした新たながん治療法開発の分子基盤になると考えられます。

また、別の研究テーマとして、DNA 二本鎖切断を修復する相同組換え (HR) 修復活性を測定する方法として ASHRA (Assay for Site-Specific HR Activity) を開発しました。ASHRA は、ゲノム編集に用いられる CRISPR/Cas9 システムを応用して、DNA 二本鎖切断を作製し、定量 PCR で HR 活性を検出する方法で、従来法より簡便で定量性に優れた方法です。ASHRA で BRCA1 の多数のバリエーションの HR 活性を測定し、PARP 阻害薬感受性を高精度に予測できることを明らかにしました。この過程で、BRCA1 が転写因子 ATF1 の転写活性化能を促進し、PARP 阻害薬やプラチナ系抗がん薬への耐性化を引き起こすことも発見しました。今後は、ATF1 の抗がん剤感受性予測のためのバイオマーカーとしての実用化や ASHRA による BRCA1 のバリエーションの診断や PARP 阻害薬やプラチナ系抗がん薬の感受性予測の臨床検体での応用に向けて研究を進めていく予定です。

以上の発表済の研究成果に加え、国際共同研究を含めたその他の研究も進行しています。今後も、社会に貢献できる成果を出せ、研究室の皆がそれぞれに力をつけていけるよう努力致す所存です。引き続きどうぞ宜しくお願い致します。

(文責：千葉奈津子)

【随 想】

イギリスでの (ほぼ) ファーストポスト
ドク

ノーサンブリア大学心理学部
濱 本 裕 美

私は 2016 年から 2022 年まで人間脳科学研究分野で修士・博士課程とお世話になっておりました。現在は海外特別研究員として、イギリスのノーサンブリア大学に所属しております。私が日本を離れた時には「まだまだ感染に注意しつつ範囲を小さめに交流」といった段階でしたので、このような加齢研ニュースへの寄稿という形で、また分野を問わず皆様の前に顔を出すことができ大変嬉しく思います。現在 (ほぼ) ファーストポスト中ということもあり、豊富な経験を持っているとも言えない私ではありますが、この寄稿を通して、皆様の参考になる、あるいは楽しませることができるようなお話を提供できれば幸いです。

さて、タイトルにもあります通り、私は現在「ほぼ」ファーストポストの研究をイギリスでおこなっている状況にあります。この「ほぼ」というのは、海外学振に補欠合格したためにビザの関係で 4 月に出発できる状況ではなく (また、イギリスのビザ発給がウクライナからの難民受け入れ最優先になり、どのくらい待たされるのか一切わからない状況だったこともあり)、6 月いっぱいまで人間脳科学研究分野で博士研究員として雇用して頂き、履歴書上のファーストポストは人間脳科学研究分野となっているためです。ビザの取得に関しては、イギリスのビザ申請は毎年細かいところが変わったり、そもそもカテゴリーが増えたりするので、インターネットで入手できる情報をそのまま信じていけないのも大変でした。このあたりは海外特別研究員や学振 PD の受け入れ経験が豊富な大学だったらもっと苦労しなかったと思います。加

齢研から海外学振を使ってイギリスに行かれる方は基本的に有名どころに行かれると思いますので、大学からの的確な支援が受けられるはずですが、そうじゃない場合は早めに準備した方がいいです。

現在私が所属しております、ノーサンブリア大学という大学をご存知の方のほうが珍しいと思います。この大学はイングランド北東部のニューカッスル・アポン・タインという都市の中心部に位置しています。地理的にも、周辺都市と比べた時の規模や発展度的にも、仙台市と非常に似た立ち位置にある都市です。ちなみに体感ですが、緯度はよほど仙台よりも高い場所にあるのですが (調べてみたらニューカッスルは北緯約 55 度、仙台は北緯約 38 度でした)、冬は仙台の方が寒く積雪も多いな、という印象です。夏は涼しく、20 度台前半くらいまでしかあがりません。ただし基本的にエアコンがないので、熱波等のせいで 30 度まで上がってしまうと涼む手法が扇風機しかありません。市内にはニューカッスル大学という大学もあり、こちらの方が有名かと思われます。ニューカッスル大学と比べて、ノーサンブリア大学の方が労働者階級の学生が多いらしいです。イギリスが階級社会であることは知識としてはありましたが、日常会話の中で階級の話がポンポン飛んでくるのは最初驚きました。また、友達が突然短期間ホームレスになったり、大学の火災報知器が頻繁に誤報を鳴らしたり、さっきまで来ることになっていたはずの電車やバスが突然消えたり、9 月からクリスマスのお話を 11 月から 1 月頭までずっとクリスマスをしていたり、自国ラグビーチームが正念場だから今週末フランス行くことにした! と水曜日に決めるというフットワークの軽さを発揮する人がいたり、日本ではあまり経験しないだろうなということがたくさん起きました。サマータイムがあるのもその一つで、夜中に時刻が切り替わるのですが、切り替わる

瞬間にスマートフォンを見ていると午前2時になった瞬間にもう一回午前1時が始まる・あるいは午前2時がスキップされるのを見ることができます。ずっとサマータイム導入地域に住んでいる人でも、常にサマータイムの切り替わりに混乱しているので、切り替わる日に重要な予定を入れない方がいいと言われていました。研究面での日本との違いに関しては、インフォーマルな共同研究が国を跨いだものでも起こりやすかったり、分業制的な気風が強く、新しく技術の習得が必要になる事柄に関して「とりあえず勉強して自分でやってみよう」というのがあまりない分プロジェクトがすごい速さで進んだり、必ず研究プロジェクトを pre-registration しないといけないというレベルで open science に関する意識がすごく高かったり……といった違いがあるかなという印象です。こういった違いのうち、やはり、他国との物理的な近さに起因する流動性が日常面でも研究面でも日本とは最も大きく異なる点かな、と思います。特に研究面では、共同研究だけでなく国際的なセミナーやネットワークイベント等がかなり活発におこなわれています。また他国で開催されるそういったイベントに参加するのも容易で、実際私も2週間ほど大陸ヨーロッパに滞在して、2種類の学会に参加し、ついでに勉強会兼ネットワークイベントのようなものにも参加できました。元々ヨーロッパは国同士での協力体制が政治・経済面で構築されているため（イギリスはブレグジットのせいで現在そこから少し外れている部分もありますが）、国際共同研究という扱いでも手続きが多少楽だったり、といった恩恵があるらしいです。こういった点が研究力の向上にもつながっていると思われませんが、この点に関しては日本では改善が難しいポイントだなと感じました。

私がおこなっている研究の話も少ししたいと思います。私は修士課程の頃から、身体像の歪み、

というものに興味があり研究をおこなってきました。身体像の歪みとは、特に摂食障害の患者さんによく見られる特徴で、自分の体の大きさを正しく推定できなかつたり、自分の体に対して過度な不満感を持ってしまったり、といった状態を指します。加齢研在籍時は、この歪みに関わる心理指標や脳活動を調べていました。この身体像の歪みを数値化するためには、身体刺激を被験者さんに見せて「どれが自分の体型が一番近いか」「どの体型が理想か」を選んでもらう必要があります。しかし、実際の体型データ・体組成データに基づいた3D身体刺激は欧米人用のものしかなく、非欧米人を対象にした研究は遅れがちな状況です。そこで、欧米人用の3D身体刺激を作った大学であるノーサンブリア大学に連絡して、「アジア人対象で同じものを作りたい」と相談したところ、外部資金で来てくれるならできるよ、とのことだったので海外学振にチャレンジしてみました。現在はアジア人をリクルートして体型を3Dスキャンさせてもらい、アジア人用の3D身体モデルを作成する、という仕事をメインに取り組んでいます。また、異なる人種の身体刺激を使うことによる影響や、個々人の背景にある文化によって身体像の歪みにどのような影響を与えるのか、ということも調べており、将来的には今作成している刺激を使って色々とfMRI実験をやりたいと考えています。

このような感じで色々な面でのカルチャーショックを楽しみつつ、現在海外学振2年目に突入して3ヶ月ほど経過しました。幸いにもホームシックや季節性感情障害(SAD)を経験しないまま、あっという間に残り滞在期間も1年を切ってしまい、意外と海外で研究活動できるな、という自信が多少つきました。ポジション探しをする際に海外という選択肢を積極的に含められる良いきっかけになり、また、新しい研究者ネットワークを開拓することもできました。ど

こかのタイミングで日本には戻りたいと思っておりますので、皆様とお会いしたり、共同研究等できる機会がありましたら幸いです。

【研究員会便り】

研究員会委員長 宇井 彩子

令和4年1月から委員長をさせて頂いております、分子腫瘍学研究分野の宇井彩子です。研究員会は、加齢研の若手研究者を中心として、研究所内外の人的交流を促し、研究を活発化する環境づくりや活動や催しを行っています。ご意見ご要望等ございましたら、いつでもお気軽に研究員会にお声がけ頂ければと存じます。引き続き、ご協力を賜りますようお願い致します。

研究員会活動内容（R5.6～R5.11まで）

1. 令和5年度研究所若手アンサンブルプロジェクトについて

部局間の共同研究を支援する「2023年度東北大学若手研究者アンサンブルグラント」(Ensemble Grants for Early Career Researchers 2023)の公募が行われました。本年度は、全42件の応募のうち17件が採択となりました。加齢医学研究所からは1件の課題が採択されました。応募件数は年度によって波がありますが、採択率の高い助成金となっておりますので、来年度以降も積極的な応募をお願いいたします。また、2023年5月12日(金)には、片平キャンパスさくらホールにて、第10回東北大学若手アンサンブルワークショップが行われました。前年度の課題採択者の研究発表や若手研究者の口頭発表、ポスター発表が行われ、優秀な発表については表彰が行われました。

令和5年度研究所若手アンサンブルプロジェクトWG 加齢研委員 家村 顕自 (分子腫瘍学研究分野) アンサンブルプロジェクト HP: [http://](http://web.tohoku.ac.jp/aric/)

web.tohoku.ac.jp/aric/

2. 加齢研新人研修会

日 時：令和5年6月14日(水)

午後1時15分から対面で開催

場 所：加齢研 SA 研究棟国際会議室

3. 令和3年度加齢研若手共同研究促進助成金成果報告会について

令和3年度加齢研若手共同研究促進助成金採択者による成果報告会を令和5年度新人研修会後、午後4時～5時15分まで対面で行いました。

4. 加齢研研究員会総会

総会委任状の確認を行い、規約第8条による総会開催の確認をいたしました。

加齢研研究員会総会議事録

日 時：令和5年6月14日(水)

午後5時～5時15分対面で開催

場 所：加齢研 SA 棟 1階フロア

1. 議長選出 宇井彩子研究員会委員長に議長をお願いいたしました。
2. 委任状の確認 出席者28名、委任状117名、計145名
(総会員数170名の過半数)により総会成立
3. 令和4年度の決算報告 収入の部、支出の部
松本健書記・会計・助成金係より報告、承認されました。
4. 令和5年予算(案)収入の部、支出の部
松本健書記・会計・助成金係より説明、承認されました。
5. その他

5. 新入会員歓迎会

日 時：研究員会総会終了後、午後5時15

分から開催

場 所：加齢研 SA 研究棟国際会議室

6. 第 160 回集談会 (R5.7.14) での研究員会第 43 回発表コンテスト

令和 5 年 7 月 14 日 (金) 午後 1 時から対面で開催されました第 160 回集談会での第 43 回研究員会発表コンテストの受賞者は下記の先生です。

第 1 位 丹藤由希子 (医用細胞資源センター)

第 2 位 山田晃生 (臨床加齢医学研究分野)
表彰式は第 160 回集談会, 研究会同窓会総会後に開催の園遊会で行われました。

7. 園遊会会場設営と司会進行, 後片付けについて

会場設営と後片付け, 司会進行 (文化・運動係) は研究員会で行うことになりました。

11:40 から会場設営を行いました。

(園遊会プログラム)

司 会 (幹事) 挨拶

所 長: 挨拶・乾杯

集談会 (コンテスト) 表彰式

副所長: 締めの挨拶

8. 第 7 回加齢医学研究所リトリートについて

日時: 令和 6 年 2 月 14 日 (水) ~15 日 (木)

(開催予定)

場所: 秋保リゾートホテル クレセント

9. 令和 5 年度加齢研若手共同研究促進助成金について

本研究費は, 加齢医学研究所研究員会に所属する研究者が研究責任者となり, 2 分野以上の分野間で密接な連携のもと行われる共同研究を支援するものです。

選考は申請書をもとに加齢医学研究所研究員

会から選抜された審査員による審査を行い, 教授会において採択研究が決定されます。

本年度はリトリートにて審査発表を予定しておりますが, 状況次第で変更があります。

10. 令和 5 年度加齢研交流セミナー

令和 5 年度第 1 回加齢研交流セミナーについて

日 時: 令和 5 年 7 月 6 日 (木)

16:00 ~ 16:40

場 所: 加齢研実験研究棟 7 階セミナー室 1

講演者: 臨床加齢医学研究分野 劉瑩旭

日 時: 令和 5 年 7 月 20 日 (木)

16:00 ~ 16:40

場 所: 加齢研実験研究棟 7 階セミナー室 1

講演者: 認知健康科学研究分野 野内 類

令和 5 年度第 2 回加齢研交流セミナーについて

日 時: 令和 5 年 10 月 12 日 (木)

16:00 ~ 17:10

場 所: 加齢研実験研究棟 7 階セミナー室 1

講演者: 生体情報解析分野 何 晨風

医用細胞資源センター 林 陽平

連絡先: 加齢医学研究所・研究員会事務局

齋藤 内線: 8576

11. 加齢研研究員会セミナー

http://www.idac.tohoku.ac.jp/site_ja/news-events/

<http://www.idac.tohoku.ac.jp/site/news-events/>

日 時: 令和 5 年 5 月 15 日 (月)

午後 4 時 ~ 午後 5 時 (対面で開催)

場 所: 加齢研 SA 棟 1 階国際会議室

講 師: Prof. Dr. Wolf-Dietrich Heyer

所 属: Distinguished Professor and Chair,
Department of Microbiology & Molecular Genetics, Co-leader Molecular

Oncology Program UC Davis Comprehensive Cancer Center, University of California, CA 95616-8665, USA
 演題：RAD52 and BRCA2 regulate pathway usage in double-stranded DNA break repair
 担当：安井 明（所属：分子腫瘍学研究分野・内線：8465）

日時：令和5年7月28日（金）
 午後4時～（対面で開催）
 場所：加齢研 SA 棟 1 階国際会議室
 講師：高橋悠太
 所属：Altos Labs
 演題：哺乳類におけるエピジェネティクス情報の次世代への継承
 担当：関根弘樹（所属 遺伝子発現制御分野・内線 8553）

日時：令和5年8月7日（月）
 午後4時30分～（対面で開催）
 場所：加齢研実験研究棟7階 セミナー室1
 講師：¹大学保一，²増田雄司
 所属：¹公益財団法人がん研究会 がん研究所 がんゲノム動態プロジェクト
²名古屋大学環境医学研究所ゲノム動態制御分野
 演題：1. DNA ポリメラーゼ動態から見るゲノム安定性
 2. DNA 複製ストレスなどで誘発される DNA 脱塩基損傷の新規修復経路のメカニズムの解明
 担当：宇井彩子（所属 分子腫瘍学研究分野・内線 8469）

日時：令和5年9月6日（水）
 午後4時～5時（対面で開催）
 場所：加齢研実験研究棟7階 セミナー室

1
 講師：富田泰輔
 所属：東京大学大学院薬学研究科 機能病態学教室
 演題：アルツハイマー病の分子細胞病態解明と創薬研究
 担当：家村顕自（所属 分子腫瘍学研究分野・内線 8490）

12. 加齢研研究会スポーツ大会について
 今年度のスポーツ大会は令和5年12月12日（火）13時から星陵体育館でバレーボール及びドッジボールを行う開催予定です。

13. 研究会委員長副委員長選挙について
 宇井彩子委員長がR5.12.31で任期満了の為、11月に研究会委員長副委員長選挙が行われます。
 選挙管理委員会のメンバーは選挙規約の第2条により以下の先生方になります。
 宜しく願いいたします。

第2条 選挙管理委員は研究会委員会の書記・会計・助成金、集談会コンテストの6名にて構成し、選挙管理委員長は選挙の時期に任意で決定する。選挙管理委員長が候補となった場合、他の者と交替しなければならない。
 これを研究会委員会で選出する。

選挙管理委員 松本 健（書記・会計・助成金 神経機能情報）
 白川龍太郎（書記・会計・助成金 基礎加齢）
 松崎 泰（集談会コンテスト 応用脳科学）
 林 陽平（集談会コンテスト

ト 医用細胞資源センター)
李 星明 (集談会コンテンツ
ト 腫瘍生物学)

佐藤 雅美先生 令和5年8月6日
加齢研呼吸器再建
目黒 謙一先生 令和5年9月25日
抗研放射線医学
小西八重子先生 令和5年11月7日
抗研臨床化学療法

今後の予定

1. 第161回集談会 (R6.2.2) での研究員会
第44回発表コンテンツ
2. 研究員会主催新年会
日時: 令和6年2月2日 (金)
集談会終了後
場所: 加齢研実験研究棟7階セミナー室1
3. 第3回加齢研交流セミナー (日程未定)
第4回加齢研交流セミナー (日程未定)

2. 第160回集談会
日時: 令和5年7月14日 (金)
午後1時から 対面形式で開催。
場所: 加齢医学研究所 スマート・エイジング研究棟 国際会議室
一般口演9題
3. 令和5年度加齢医学研究所研究会同窓会総会, 懇親会 (園遊会)
日時: 令和5年7月14日 (金)

【研究会同窓会広報】

庶務幹事 山 家 智 之

庶務報告

1. 研究会同窓会会員の確認 (令和5年11月現在)
会員数 2,216名
(所内在籍者225名, 所外715名 (過去5年間の会費未納者は, 238名で加齢研ニュースは送付しておりません。)) 海外92名, 退会者632名, 物故者339名, 住所不明213名)
賛助会員 23施設
購読会員 17件
物故会員 (令和5年6月~令和5年11月までの間に事務局に連絡がありました。)
鈴木隆一郎先生 令和4年7月13日
抗研内科, 生化学
市川 恒次先生 令和5年4月25日
抗研臨床癌化学療法
平賀 章先生 令和5年6月6日
加齢研遺伝子情報
芳賀 研三先生 令和5年7月28日
抗研外科

総会 集談会終了後 対面で開催
加齢医学研究所スマート・エイジング研究棟 国際会議室
懇親会 (園遊会) 総会終了後
加齢医学研究所スマート・エイジング研究棟1階ロビー

4. 加齢研セミナー (令和5年6月~令和5年11月の間に開催されました。)
日時: 令和5年6月7日 (水)
14時30分~15時45分
場所: 臨床加齢医学研究分野 スマート・エイジング棟4階セミナー室
Web ハイブリッド開催
講師: 小池 敦
所属: 東北大学大学院情報科学研究科実践的情報教育推進室 特任准教授
演題: 深層学習の発展とその影響: 画像認識から自然言語処理へ
担当: 臨床加齢医学研究分野 瀧 靖之
日時: 令和5年7月31日 (月)

午後5時～6時30分
 場所：加齢研実験研究棟7階大会議室
 講師：佐々木敦朗
 所属：シンシナティ大学医学部・慶應義塾大学先端生命科学研究所・広島大学病院
 演題：GTP代謝と生命のダイナミズム：生命機能進化と生体制御への新視点
 担当：遺伝子発現制御分野 本橋ほづみ

日時：令和5年8月1日（火）
 午後5時～6時30分
 場所：加齢研実験研究棟7階セミナー室1
 講師：中別府勇作
 所属：日本学術振興会サンフランシスコ研究連絡センター・センター長/九州大学名誉教授
 演題：老化における活性酸素による核酸の酸化とその防御機構の意義
 一発がんからアルツハイマー病まで—
 担当：遺伝子発現制御分野 本橋ほづみ

日時：令和5年9月20日（水）
 午後1時～2時30分
 場所：加齢研実験研究棟7階セミナー室1
 講師：Iok In Christine Chio, PhD
 所属：Genetics and Development, Institute for Cancer Genetics, Columbia University Medical Center
 演題：Malignant consequences of redox signaling in pancreatic cancer
 担当：遺伝子発現制御分野 本橋ほづみ

日時：令和5年9月25日（月）
 午後5時～6時30分
 場所：加齢研実験研究棟7階セミナー室1
 講師：Liron Bar-Peled, PhD
 所属：MGH Cancer Center, Harvard Medical School Department of Medicine

演題：Identification of Druggable and Redox Vulnerabilities in Cancer
 担当：遺伝子発現制御分野 本橋ほづみ

日時：令和5年10月11日（水）
 午後5時30分～7時
 場所：加齢研実験研究棟7階セミナー室1
 講師：Emery H. Bresnick, Ph.D.
 所属：University of Wisconsin School of Medicine and Public Health
 演題：Small Molecule Components of GATA Factor-dependent Regulatory Networks Governing the Development and Function of Stem and Progenitor Cells
 担当：遺伝子発現制御分野 本橋ほづみ

日時：令和5年11月6日（月）
 午後0時～1時30分
 場所：加齢研実験研究棟7階 大会議室
 講師：Thales Y. Papagiannakopoulos, PhD
 所属：Department of Pathology, New York University Grossman School of Medicine/Laura and Isaac Perlmutter NYU Cancer Center, New York University Grossman School of Medicine
 演題：Uncovering the mechanisms of disease progression in genetic subsets of lung cancer
 担当：遺伝子発現制御分野 本橋ほづみ

5. 加齢研ニュース発行
 79号 令和5年6月
 80号 令和5年12月

今後の予定

1. 加齢研セミナー

日時：令和5年12月11日（月）
 午後3時30分～

場所：加齢研実験研究棟7階セミナー室1
 講師：今井眞一郎 テオドール & バーサ・
 ブライアン卓越教授

所属：ワシントン大学医学部発生生物学部・
 医学部（兼任）

演題：NAD World 3.0
 哺乳類の老化・寿命制御における臓器
 間コミュニケーションの重要性と抗老
 化方法論

担当：統合生理学研究分野 佐藤亜希子

2. 第161回集談会

日時：令和6年2月2日（金）
 午後1時から

場所：加齢医学研究所 スマート・エイジ
 ング研究棟 国際会議室

第31回加齢医学研究所研究奨励賞・
 受賞記念講演

一般口演

3. 第162回集談会

日時：令和6年7月19日（金）午後1時か
 ら 対面形式で開催を予定。

場所：加齢医学研究所 スマート・エイジ
 ング研究棟 国際会議室

一般口演

4. 令和6年度加齢医学研究所研究会同窓会総 会、懇親会（園遊会）

日時：令和6年7月19日（金）
 総会 集談会終了後

場所：加齢医学研究所 スマート・エイジ
 ング研究棟 国際会議室

懇親会（園遊会） 総会終了後、予定

5. 加齢研ニュース発行

81号 令和6年6月

82号 令和6年12月

[編集後記]

加齢研ニュース第80号をお届けいたします。
 今号では、腫瘍生物学分野の千葉先生から分野
 紹介の寄稿をいただき、随想として、濱本先生
 からイギリスでの留学記を寄稿いただきました。
 お忙しい中、寄稿していただいた先生方に
 心よりお礼申し上げます。加齢研ニュースでは、
 加齢研の現在行われていること、研究所の方向
 性なども知ることができる、良い情報提供の場
 であると思います。これからも加齢研ニュース
 が、加齢研関係者のよりよい交流の場となるよ
 うに活動していきたいと思っております。引き
 続き、加齢研ニュースにご支援、ご協力をお願
 いします。

（文責：小笠原康悦）